論文

『奇談情之二筋道』について―読本改題本と人情本―

Introduction to "Kidan-Nasake-no-Futasujimichi"

木越俊介
Shunsuke KIGOSHI

一　国会図書館蔵『奇談情之二筋道』紹介

国会図書館に『奇談情之二筋道』と題される作品が所蔵されている。一見、洒落本もしくは人情本風の題ではあるが、これまで細部にわたり言及されたことはないようなので、左に簡単な書誌を紹介しておく。

所蔵　国立国会図書館（請求記号　一九〇―一四〇）
編成　半紙本（縦22・2×横15・5糎）　四巻五冊（巻四が上下二冊）合一冊
表紙　薄青地に観世水（斜）と梅花
題簽　中央　方簽・竹の飾り枠内に白抜きで「新梓／畫内／話説」
　　左肩　短冊型の貼題簽があるものの、文字はかすれて判読困難。
内題　「奇談情之二筋道第壱巻（～第四巻下）」
著者　尚古老人編（見返し）
画師　渓斎英泉画（見返し）
口絵　見開き一丁
刊記　「文政六年癸未孟春／東都書肆／馬喰町三町目　若林清兵衛／神田三嶋町　梅澤伊三郎」（巻四下の奥付）

右刊記には「文政六年」とあるものの、本文部の板下の書体は明らかにこれより遡る時期のものである。さらに内題は墨付きの具合から入木であることが一目瞭然であり、何らかの書の改題であるとの見当がつく。結論から先に述べると、本書は寛政六年（一七九四）刊の読本『壺菫』の改題本である。より正確に述べるならば、『壺菫』は既に一度、寛政九年に『怪談頤草紙（このごろ）』と改題されているので、そのさらなる改題本ということになる。『壺菫』は『初期江戸読本怪談集』（国書刊行会、二〇〇〇）、『怪談頤草紙』は倉島節尚氏編『近世怪奇談』（古典文庫五五一、一九九二）にそれぞれ翻刻・解題が備わるので、適宜参照されたい（よって本稿では、右二作間の改変部分についての言及は必要最小限にとどめる）。

まずは『奇談情之二筋道』と改題したことにともなう措置や、『壺菫』・『怪談頤草紙』との相違点について述べていくことにする。

表紙・題簽・内題（前述の通り、入木で改変）については前掲の通りである。これに加え、『二筋道』には新たな見返しが付され（『壺菫』『怪談頤草紙』は管見に入った諸本いずれも見返しなし）、見返し題として「貞烈奇談情之二筋道　全四冊（ママ）」と記される。この「四冊」というのは、実質的に「四巻」という意味であろう。というのも、本書は元来「巻

五」にあたる部分を「巻四の下」と改変し、強いて四巻五冊という構成にしているからなのだが、なぜこのような措置を施したのかは未詳である。また、見返し右上に「尚古老人編／渓斎英泉画」とあり、左下には「金令閣」の名が見え、これは梅澤伊三郎の堂号であることから、このたびの主板元は梅澤であったことが窺われる。

次に序以下についてであるが、やや煩瑣になるので、次に掲げる表とともに触れていくことにする（○印は上の項目に同じ、斜線はなしの意を示す）。

	壺菫	怪談頤草紙	奇談情之二筋道
序類	「怪史壺菫序／…／寛政甲寅二月壬辰　源温故選」（漢文序） 蟻登美・としまのさと人による和文序	○（ただし、序題を「怪談頤草紙」と改刻し、年誌を削去。）	
口絵			漢詩（半丁） 見開き一丁
目次		「怪談頤草紙目録」（一丁）	「奇談情之二筋道目録」（半丁）【差替】
挿絵	巻1　三ウ・四オ 九ウ・一〇オ	○	○
	巻2　三ウ・四オ 九ウ・一〇オ	○	○
	巻3　三ウ・四オ 九ウ・一〇オ	○	○
	巻4　三ウ・四オ 九ウ・一〇オ	○	○【差替】
	巻5　三ウ・四オ 九ウ・一〇オ	○	○【差替】
跋	「後序」（「…おのれ常蔭筆をとりて、かつ書且絵かきつ」）	○	○【差替】（図イ）
奥付	「寛政六年甲寅臘月　書肆江都馬喰町三丁目　若林清兵衛」 （※後印　奥付部のみ改刻） 「寛政七年乙卯臘月　書林皇都寺町蛸薬師下ル　山本平左衛門／浪華心斎橋順慶町　渋川与左衛門／江都馬喰町三丁目　若林清兵衛」	【上記後印のさらなる改刻か】 「寛政九年丁巳正月／書林／江戸伊勢町裏河岸　中山清七／皇都寺町蛸薬師下ル　山本平左衛門／浪華心斎橋順慶町　渋川与左衛門／江都馬喰町三丁目　若林清兵衛」（※上総屋忠助板もあり）	「文政六年癸未孟春／東都書肆／馬喰町三町目　若林清兵衛／神田三嶋町　梅澤伊三郎」

【図ア】口絵

【図イ】巻三挿絵

まず序類については、『頤草紙』までは残存していた漢文序は省かれ、新たに半丁の七言絶句の漢詩が付される（この漢詩については後述）。また、「後序」も省かれている。

これ以下、前二書にはなかった口絵（薄墨使用）を見開き一丁分新たに付し（図ア参照）、続く半丁は「奇談情之二筋道目録」にあてる。この目録も全て新たに彫られたもので、各巻毎の内容解説の小文も全

て改められている。

次に挿絵についてであるが、原書の松樹斎常蔭（未詳）による挿絵は全て差替えもしくは削去されており、画師は渓斎英泉に変っている。口絵は既に触れたので以下挿絵について記す。前二書では、各巻規則的に三ウ・四オと九ウ・十オの見開き二丁分に計十点の挿絵があったが、『奇談情之二筋道』では減少している。すなわち、巻二には挿絵が全くなく、また巻一と巻三には九ウ・十オにあたる部分の挿絵がなく、その前後の丁付を柱ごと改変しているものの、各巻いずれも「十」の丁付が失われてしまっている。そして巻四上に至って、前二作と同じ箇所に新たな見開き二丁分の挿絵があるものの、巻四下ではこれまでとは逆に九ウ・十オのみに挿絵があり、その代わり今度は「五」の丁付が失われている（柱記について詳しくは後述するが、五冊目は内題に「第四巻下」とあるにも関わらず、柱は「巻之五」となっている）。

本文に変更はないが、わずかにルビを削ったり新たに彫り直したりしていることが認められる。

さて、この『奇談情之二筋道』は『国書総目録』によれば国会図書館のみの所蔵となっているが、巻四（上）のみの零本を鈴木圭一氏が御所蔵の旨をご本人から御教示の上御貸与賜ったので、ここで触れておきたい。

国会本と鈴木本との相違点は大きく二つあるが、まず表紙と題簽が異なっている。鈴木本の表紙は茶色無地。中央に方簽と左肩に短冊題簽がある点では国会本と同一であるものの、鈴木本の方は氷割れの飾り枠内に白抜きで「増補／傾（ママ）草紙／一別号」とある点が異なる。内題は国会本と同じく「奇談情之二筋道」であるにもかかわらず、「傾草紙」の名が掲出されているわけである。国会本の方は合一冊なので、各巻の表紙がどのようなものであったかは不明である。ただし参考までに、鈴木本の方簽の飾り（氷割れ）は、先に国会本紹介の折に触れた漢詩、口絵、目録それぞれの匡郭の天地等にあしらわれる飾りと一致している。

もう一つの相違点は柱である。『怪談頤草紙』改題の折に、もとの柱題「壺菫」は削去され、柱は上部から順に「魚尾、巻数、○丁付、下部の黒い長方形」とされた。これに対し『奇談情之二筋道』国会本は先述した丁付の処理に加え、板心下部の黒い部分も削って失われている。ところが、鈴木本はこの板心下部の黒い長方形が残存しているのである。

ごく自然に考えると、これらの相違点はおそらく順序として鈴木本が国会本に先行することを意味するのではないだろうか。鈴木本が零本で奥付等も分からない以上何とも言えないが、改題本である『奇談情之二筋道』にも複数の刷があることは確かなようである（もっとも、仮に鈴木本が国会本に先んじて刷られた本であっても、英泉の活動時期を考えると文政六年からそれほど遡らないと思われる）。

二　『壺菫』改題の意味

『壺菫』（『怪談頤草紙』）は四半世紀あまりの時を経て新たなる意匠をまとったわけであるが、寛政期の読本が文政期に再び改題される理由はどこにあったのだろうか。この点を考える上で、同じ寛政期の江戸読本『菟道園（うじのその）』（寛政四年板）が文政七年（画工・英泉）に後印改修[1]、『邂逅（わくらば）物語』（寛政九年板）が文政四年に『奇談園の梅』（画工・英泉、鶴屋金助・大嶋屋傳右衛門板）と改題改修、さらには『破几帳』（寛政十二年板）が文政四年に『奇譚桃の園』と改題改修[2]、といった一連の事実は看過できないであろう。また、右はいずれも半紙本であるが、中本型読本についても、寛政期の振鷺亭作品のうち『教訓いろは酔故傳』（寛政六年刊）が文政三年に『時代世話建久酔故伝』（序・春水、

口絵・英泉、大坂屋茂吉・鶴屋金助板）と改題改修、『風流夕霧一代記』が文政五年に『紀文大尽全盛葉南志』（画工・英泉、大坂屋茂吉・鶴屋金助・美濃屋市兵衛・加賀屋源助・越前屋長次郎板）と改題改修されている。こうした点を視野に入れると、文政初期に特有の一つの現象として広く捉えるべきかもしれない（また、この時期は寛政期の読本に限らず改題や再印・改刻そのものが盛んだった可能性もあるが、この点は今後さらに調査してきたい）。

ただ少なくとも『情之二筋道』について言えば、右のうちとりわけ『邂逅物語』改題や中本型読本のケースとの共通項が多く見られる。画工が英泉という点は『菟道園』改修についても言えることであるが、『壺菫』や『邂逅物語』はともに長編構成であり（右のうち『菟道園』『破几帳』のみ短編奇談集）、この二作の改題における「奇談＋洒落本風の題」という傾向も似通っている。さらに内容に注目すると、『壺菫』はかなり情話的要素の強い作品であり、中本型読本二作は世話読本と言うべき内容、そして『邂逅物語』はそれほど情話がかった作品とはいえないが、少なくとも複数の男女の「邂逅」を話の主筋としている。これらは改題時の書肆は異にすれど、同傾向の改題ものと見てよいと思われる。以下しばらく『情之二筋道』について、内容面に即しながらもう少し掘り下げていくことにしたい。

『壺菫』という物語の内容をごく簡単に紹介すれば、遊女・勝浦と深く契りを交わした男主人公・平次郎が、主家の女性・お舟との縁談をもちかけられる。平次郎は勝浦を思いつつもお舟との縁談が進み、これに嫉妬した勝浦は狂い死に、幽霊となって平次郎の妻となったお舟をも殺す、という、奇談ながらかなり情話がかった作品である。本作品の物語や文体の特色については、前掲『初期江戸読本怪談集』の大高洋司氏による解題や三浦一朗氏「『壺菫』考」(3)に詳しい。寛政後期の江戸読本に主情的な作風を持つものがいくつか散見されることは既に述べたことがあるが(4)、私見ではこの『壺菫』はそうした作品群に先立ち、しかも一連の流れとは別に生まれたものと考えている(5)。『壺菫』は江戸における長編読本の最初期に位置する作品であるが、『怪談頤草紙』改題の折はその怪異性に、『奇談情之二筋道』の折はその情話の部分にそれぞれ焦点があてられたと言えよう（もっとも、後者にも「奇談」という語が含まれているので、一方で怪談もの・読本といった路線をも視野に収めていることは言うまでもない）。

このことは改題に際して新たに付された扉部の漢詩にも反映されている。くだんの漢詩は次に掲げる、唐代の女性詩人・劉媛（生卒年不詳）の「長門怨」である。

雨滴梧桐秋夜長　　雨は梧桐に滴り　秋夜長し
愁心和雨到昭陽　　愁心雨に和し　昭陽に到る
淚痕不知(6)君恩斷　　淚痕知らず　君恩の断
拭却千行更萬行　　千行を拭却すればさらに万行

「長門怨」とは、漢の武帝からの寵愛を失った陳皇女の悲しみをモチーフに詠まれた詩であるが、この詩の内容が本作品の勝浦に重ねられていることは明らかであろう。とはいえ、この詩が当時どのくらい人口に膾炙したものであったかはよく分からない（『唐詩選』、『三体詩』に見えないが、『連珠詩格』には所収されている。また、江戸初期の『寒川入道筆記』にも引用されていることが確認できた）。ともかく、『情之二筋道』を開くとまず目に留まるのがこの詩であり、編者ないしは書肆がこれにより作中女性の憂愁を暗示しようとしていたことは間違いない。

三　写本もの人情本との比較

さて、鈴木圭一氏「人情本の型」（『近世文芸』70、一九九九・七）

に「写本もの人情本」として紹介されるうち、『奇談情之二筋道』と類似した題を持つ『お高／半次郎情之二筋道』（文政五年序）なる書が見える。時期的な点からしても『奇談情之二筋道』と何らかの関連を持つ可能性が考えられるのだが、幸い、鈴木氏が御所蔵本を御貸与くださった。そこで内容を比較してみたのだが、字句の一致やストーリー上の直接的な影響関係を見出すことはできなかった（鈴木氏前掲論文によれば、『お高／半次郎情之二筋道』は刊本『婦女今川』前編の底本ということである）。梗概を前掲論文から引用する。

本町辺の生薬屋ひいらぎ屋のお高は麹町の半治郎に嫁ぐ。半治郎は本家筋の娘なのでうとみ相手にしない。お高は実家に戻るがひたすら半治郎を思う。また兄や両親を次々に失い継母に虐められる。半治郎は通じていた家の女性（お舟…木越注）にも嫌気がさし追い出し、吉原で放蕩し芸者お峯を亀井戸に囲う。そこはお高叔母の隠居所隣で両人再会。お高の誠意とお峯らの取り持ちでめでたく結ばれ家栄え子孫繁栄めでたし。

おそらく両者は無関係なのであろうが、興味深いのは、偶然ではあれ両作品とも末尾近くで、結ばれた男女に対しもう一人の女性が怪奇的な趣向で絡んで来ることである。

まず『奇談情之二筋道』は前節で触れたように、遊女・勝浦の幽霊がお舟をとり殺す。対して『お高／半次郎情之二筋道』の方では、半次郎がそれまで疎んでいたお高とよりを戻し、半次郎を思い続けていたお高は彼との添い寝に幸せであるはずだが、その折にいつも悪夢を見るのである。少し引用してみよう。

お高「ハイ左様ならお先へふせります。御めん遊せ」と先へ寝る。半次郎は枕元に本をみている。しばらくしていつものごとくまたうなされ、さもくるしそふに声立る故「お高〳〵」とゆりおこせば、惣身ひへ氷り物もいわずくるしむゆえ、例の湯をのませ色〳〵かいほふすれどもうつ〳〵として口もきかず。そして半次郎がお高にうなされる訳を問い詰めると、「お舟が来ていじめる夢を見」てのことだと明かす。

半二郎はおかしがり「成ほどおめへは子供だぞ。そんなばかな、あんまり気がちいさいから心で心をなやますのだ。なんのお舟がおめへに恨みが有物か、恨くらいならおれを恨わな。麹町にいた時分の事をおもつてねるからそんな夢をみるのだ。おれが側にいるから何もこわい事はねえとおもつて寝てみな。うなされやアしまい」と色々にいへば、お高もがてんしてお峯がはなしといゝ半次郎のいふ事を能々おもへば実にそふいう事も有らんと気を取直し、半次郎と一所に寝ても一向おふねの夢もみず。いつの頃よりか半次郎もうわきはやめてお高のみてうあひし（…）

結局はお舟の生き霊などが原因なのではなく、半次郎が諭して安心させることで収まり、話の上では二人がさらなる愛情・信頼関係を築く契機となる挿話となっているのである。

四　人情本と怪異

では、板本『情之二筋道』の情話性と怪異性の混在は、文政初期の小説界にあって違和感を抱かれたのであろうか。そこで、二つの『情之二筋道』と相似た点を有する、鼻山人（東里山人）作の文政九年板人情本『廓雑談』（渓斎英泉画）と比較してみたい。

本作品は、艶蔵（逸麿）をめぐって、女房おりかと花魁・花里がお互い憎しみ合うという展開になっているのだが、その二編上に次のような場面が見られる。

花里（はなさと）ホツト溜息突ながら「ホンニ怖ひ夢を見いしたヨ　さん「いつそ悲しい声を出して妄語（うなされ）なさるゆへわたしも目が覚て肝を潰しま

した、あんまり逸丸さんの事に屈度して彼是と苦労なさるゆへそこでおもふ事夢に見るト、そんなに夢鬼もなさるのだ、夢は五臓の煩ひと申ますからずいぶん気保養をして煩はねへやうにしなさるがい、　花「おあり難ふおざりいず、逸まろさんの事も今じやア苦労にも致しいせんがホンニぬしのおつせへす通りおもふ事夢に見るトアノおりかさんの恪気深ひ心から此方の事が知たならさぞ気をお揉なんせうとその事ばかり思ツて居たせへかたつた今おりかさんが爰へたづねてお出なんして段〳〵の怨みつらみわつちも今更隠すにもかくされねば何ニもかもうち明ケて是も矢張悪縁でおざりいせう、おかみさんのあらつしやる事も随ぶん承知で迷ツたのがホンニ因果でおざりいす世間の義理も捨てしまひ親へのふ孝も覚悟してかうして居りイす心根を可愛想だトおぼしめし遠目に見て居て下さりまし汨ながらに詫言したら、エゝこゝな胴欲ものめ面を見るのも怨めしいトお言なんス口が耳まで裂、目は釣上りてそれは〳〵怖しい顔色、わつちが胸さきへ喰付なんしたやうにおもはれて目が覚イしてもいつそ胸がドキ〳〵致しいす

「そりやアおまへのふがいない心から気で気を病といふもんでござります

まるで写本『情之二筋道』前掲場面の反復であるが、実は『廓雑談』では「ふがいない心」から起こる気の病などではなく、直前の前編下には次のようにあったのである。

いつとなく女ばうおりかも此事をくわしく知りて胸の火の今は燃立口惜さ、男怨しとおもはぬも女子の情の罪深く只花里を嫉妬と怨に迫る恨みより、おのれ安穏にて置べきか今にや思ひ知らせんと凝り塊りし女の魂神、呪詛殺さん一念力、食を断身を清め無言の行の丑満頃、蜜かに忍ぶ庭の隅、身は爰にあるとても心は通ふ黒介の稲荷の祠へ立願して怨みの一念神力にておもひ届かせたびたまへと祈るも冷凄月影にうつる姿も白むくの湿る夜露に更て行破軍の星と諸ともに傾く顔に振乱す丈長き黒髪もアラ無念やとおもふ度〳〵直くと立て暍ける先よりボツト燃出る火は糸ならで百筋ばかり立登りてはパツト消きえては後より燃あがる光は青く又赤く黄ばむ炎の照〳〵と果は一ツに塊りて火の玉となりふはり〳〵と大をん寺前の方さして飛ゆきしは怪しといふもなか〳〵に身の毛も弥立はかりなり。

これはむしろ、板本『情之二筋道』（『壺菫』）のクライマックスを彷彿とさせる。

丑にもならんとおもふ頃、風少し吹出たり。時雨は猶ふりきぬるに、枕のもとのともし火、消んとしてはあきらかになり、何となく、しきりに物すごく思はるゝに、妻戸をあけて入くるものあり。「たれにか」とみれば、いとあやしきをんな、枕もとを過て、おくへいらんとすれば、お舟殿しきりにをびへ給ふ。御身のうへのきづかはしさに、おそろしとおもふこゝろもうせて、御そばへまいらんとをきかへれば、かの女ふりむきて、はたと見たりし顔のおそろしさ、何にたとへん方なく、たゞ引たてらるゝやうにおぼえて、其まゝたをれ絶いりぬ。平次郎は、このほどのつかれに寝入たりしが、お舟殿のをびえたまふこゑにおどろきてみれば、火は消たり。ゆりをこせど、しとゞあせになりて、いよ〳〵わなゝき給ふ。

もちろん、登場人物の形象が三作品いずれも異なっているし、右の板本『二筋道』では、勝浦の霊が平次郎には見えないという点に単なる復讐譚以上の抒情性が加味され、一貫して運命に翻弄される人々の悲劇として展開する。これに対し『廓雑談』のおりか・花巻の方は泥仕合の末、周囲の人も巻き添えにしつつ両者とも死に至るのであり（板行年から考えて『四谷怪談』を意識しているのだろう）、物語におけ

る妬心の扱い方が全く異なっている。さらに平次郎が出家するのに対し、逸麿は新たに店を開き繁昌するという結末の違いや文体の相違など、作品全体から見れば右の引用箇所は表層的な類似に留まっている。また、鼻山人の人情本作品は伝奇的要素が強いこともよく知られているので、この点も差し引いて考えなくてはならないだろう。

しかし逆に言えば、少なくとも文政初期のこの時期は、奇談（読本）と（初期）人情本が怪異や情話性を介して隣接することもあったのであり、これは後年の『梅暦』に代表されるような人情本が定着するまでの過渡的な現象なのであろう。さらに言えば、本節で触れた三作いずれも巷説との距離の近さを感じさせる点（『廓雑談』は安永・天明期の実話が元である）が、より本質的な類似点として挙げられるのである。

まとめ

筆者が興味を覚えるのは、二節で見た改題改修本の出現時期がちょうど人情本発生期と重なっていることである。後印ないし求板した書肆は、この時期に男女の出会い・別れ等を主題とした作品をある一定の様式のもとに再利用しているわけであり、英泉が絵を描き、題に雪月花や「情」などの文字を含むといった点が文政初期の読者へのセールスポイントとなっていたはずである。こうした改題本のあり方が人情本の成立過程を考える上での一つの補助線になることは間違いない。

言うまでもなく人情本成立の中心には、写本人情本の広まりを背景に『清談峯の初花』や『明烏後正夢』などが中本で板行されたことがある。また、その周辺に目を向ければ、中本型読本の後編として描かれた一部の作品が人情本であることや(7)、先に触れた中本型読本の改題など、やはり中本という様式が基本線にあったことは確かである。しかし文政初期という過渡期においては条件次第で半紙本読本もここに加わることが可能だったのであり、その有力な条件のひとつが巷説めいた世話性や情話性であったと言えよう。この時期はこうした要素を求める機運が前代に増して高まり、写本の板本化、改題改修、そして新作などと様々な形をとりながら一気に顕在化した時代であったと位置づけることができる。

それにしても、江戸における長編読本の濫觴とも言える『壺菫』が、奇談とは別の力点で読み替えられる可能性を備えていたことは、寛政期の読本が、いわゆる後期江戸読本の定型といかに異なる方向性を指向していたかに改めて気づかされるのである。

注

（1）この点、山名順子氏「『圃老巷説菟道園』の挿絵について―文政七年の再版本を中心に―」（『近世部会誌　第2号』二〇〇七・十二）参照。

（2）筆写未見。近藤瑞木氏「秋雨物語解題」（『初期江戸読本怪談集』、国書刊行会、二〇〇〇）の指摘による。

（3）『日本文芸論稿』27（二〇〇二・一）。参考までに、氏は『壺菫』が『源氏物語』夕顔の巻の措辞を利用しつつ、その原拠を唐代伝奇「霍小玉傳」とする可能性を指摘している

（4）拙稿「上総屋利兵衛の読本出板」（『読本研究新集』第４集、翰林書房、二〇〇三年六月）。

（5）右拙稿の注22。

（6）「知」の字を用いるのは例外的で、一般には「学」となっている。

（7）例えば、梅暮里谷峨作『江戸堅木浪華梅』（文政五年板）の後編は『園の曙』（文政七年板）という明らかな人情本である。もと

より、文化期後半から文政初期にかけての中本型読本が人情本と重なり合っていることは高木元氏「中本型読本の展開」（『江戸読本の研究』ぺりかん社、一九九五）などに指摘がある。

御所蔵資料を快く御貸与くださった鈴木圭一氏に心より感謝いたします。

本稿は、京都近世小説研究会二〇〇七年五月例会および同年七月国文学研究資料館「近世後期小説の様式的把握のための基礎研究」プロジェクト共同研究会における口頭発表に基づくものである。席上、御教示を賜った先生方に感謝申し上げます。

なお、本研究は平成十九年度科学研究費（若手研究）による研究成果の一部である。

（日本近世文学）

Introduction to "Kidan-Nasake-no-Futasujimichi"

Shunsuke KIGOSHI

This paper introduces "Kidan-Nasake-no-Futasujimichi"(published in 1823) and proves that it is based on "Tsubosumire"(1794).